

いわての復興教育 ～この1年の実践とこれから～

発表者

大船渡市立越喜来小学校 副校長 遠藤 耕生
九戸村立長興寺小学校 副校長 紺野 良
宮古市立津軽石中学校 教諭 星野 能之
金ヶ崎町立金ヶ崎中学校 教諭 小原 道宏
県立前沢高等学校 教諭 近藤 良子

1 越喜来小学校の取組

(1) はじめに

東日本大震災によって、越喜来小学校は津波で全壊、崎浜小学校は耐震上校舎の一部が使用不可、校舎が無傷であった甫嶺小学校の校舎に3校が集まることになり、平成24年度に統合となりました。

(2) 防災教育を柱に

防災教育に取り組むに当たり、児童や保護者、地域の実態をつかみ、本校の目指す防災教育の目標等を決めました。目指す子ども像として、保護者や教師の願いである「状況に応じて主体的に判断、自分の命を守ることができる子ども」「自他の命を尊重し、ボランティア精神を身につけた子ども」、地域の願いである「郷土を愛しその復興、発展について主体的に考える子ども」を大切にしました。以上のことから、災害の理解、防災リテラシー、人づくりの3領域でカリキュラムを編成し、低学年で年間10時間、中高学年で20時間を目安としました。

実践に当たって2つのことを意識しました。

1つは、状況に応じて主体的に自分の命を守る子どもを育成するため、授業の中で「自分だったらどうする」と問い続けたことです。2つ目は、学校が主体となって進めた防災教育を家庭や地域、関連機関に「防災おきらい通信」として発信し連携を深めるということです。

(3) 実践例

実践例を紹介します。「災害時に必要なものは何か？」の授業では、「避難しなければなりません。何を持って逃げますか？」と発問し考

えさせました。授業の様子を「防災おきらい通信」で発信したことにより、家庭や地域で防災について話し合ったり、考え直したりするきっかけになりました。また、「消防団の仕事を知ろう」の授業では、将来人の役に立つ仕事がしたい、地元の復興のために働きたいという人づくりにつながるため、地域の消防団の話をお聞かせしました。さらに、「防災マップをつくろう」の授業では、津波災害時に避難できる安全な高台はどこかを自分たちで考え、実際に街歩きをしながらマップ作りをしました。このマップは地域や保護者の意見も取り入れながら改善されており、ウェブ上でも見ることができるので、地域で共有されることにつながります。

(4) まとめ

成果として、「その時どうする」と考えさせる指導を積み重ねたことで、子どもたちが主体的に思考、判断し行動できる力が付いてきていること、保護者や地域に情報発信したことで連携が深まってきたことがあげられます。

課題としては、復興にむけて刻々と変わる地域の現状に応じて「防災おきらいプラン」を見直して行く必要があるということです。

最後に、防災教育は自分の命を守り、人の命を救うという思いをもちました。今後も、実態に応じて改善しながら復興教育に取り組んでいきたいと思っております。

2 長興寺小学校の取組

(1) はじめに

本校は県北の農村地帯、九戸村にあります。

児童数39名、教職員数11名、学級数4、複式が2という小規模の学校です。本校では、復興教育のねらいを「自他の命を守り、人のために尽くす社会人の育成を目指す」とし、少子高齢化地域であるという特性を生かしながら、これまでも取り組んできた「ボランティア教育」と「防災教育」を二本の柱としてきました。

(2) ボランティア教育

ボランティア教育について紹介します。被災地に寄り添い、子どもたちの心を育て続けるように考えたのが、シクラメンの花を贈る「まごころフラワー作戦」です。2年目は、全校児童による「長興寺小学校まごころ花くらぶ」を結成しました。昨年9月、育てたシクラメンを持って野田小学校を訪問し、交流の機会をもちました。この活動が本校の伝統となったとき、被災の少なかった内陸部の子どもたちが、岩手の復興を願い、人のために率先して尽くす子どもに育つのではないかと思っています。

(3) 防災教育

もう一つの柱は、地域の強みを生かし命を守る防災教育の実践です。まず、避難訓練の見直し、震災津波を知り命の大切さを学ぶため講演会を行いました。そして、安全防災環境の中で一番の問題である交通安全について、地域の方の協力を得て取り組みました。学区を通る国道340号は道幅が狭く、危険が多いなかを子どもたちは登校しています。そこで、高齢化率が高いという強みを生かし、老人クラブを中心に交通安全協会、防犯協会、交通安全母の会、駐在所、教育委員会、PTA等にご協力をいただき、「長興寺小学校地区安全ネットワーク」を立ち上げ、見守り活動をしていただきました。今後も地域安全活動、地域防災、地域防犯等、地域の活性化に大きな役割を果たしてくれることと期待しています。

(4) まとめ

成果としては、花を届ける等の活動を通して被災地や地域のために「自分にもできることがある」という思いをもてたこと。また被災地の様子や復興への思いを知ることで、被災地に目を向け思い続ける取組の基盤ができたことがあ

げられます。課題は、被災地の学校に寄り添う活動を継続し、子どもたちの心を育てること。また、自校の安全、防災環境を見つめ改善を図ること、地域づくりに貢献していく学校のあり方を考えていくことがあげられます。

まとめとして、内陸部の子どもが地震や津波に向き合い、自分のこととして受け止めながら、岩手の復興、県北地区の発展に尽くす社会人を育てるシステムを構築することが大切だと思っています。

3 津軽石中学校の取組

(1) はじめに

今年度、本校は復興教育の推進校の指定をいただき、震災で用具の全てが失われた「郷土芸能の復活」をテーマに取組を進めてきました。

(2) 郷土芸能の取組と震災の影響

平成22年度まで30年以上にわたり、約90%の希望する生徒が「法の脇鹿踊り」「津軽石さんさ」「赤前ソーラン」「栄通り太鼓」のいずれかの郷土芸能の取組に参加し伝承してきました。平日の夜や休日に地域の方の指導のもとで練習し、文化祭で発表してきました。保護者には送迎や着付けを協力してもらっていました。

しかし、平成23年度は、東日本大震災の影響で文化祭での郷土芸能発表は見合わせざるをえない状況となりました。

本校は宮古湾の奥に位置し、海から距離がありかさ上げもしてあるので、校庭と倉庫の被害にとどまりました。しかし、海沿いの法の脇地区、赤前・栄通り地区は、高台以外は全壊という状況でした。そして、「法の脇鹿踊り」の道具類全てや「栄通り太鼓」の法被、練習場所だった公民館等が失われ、郷土芸能の取組は、これまで通り行うことができなくなりました。

(3) 郷土芸能の復活

今年度になり、郷土芸能を復活させたいという声が生徒の中から出始め、広がりを見せるようになったことから、復興教育の中心に郷土芸能の復活を位置づけることとしました。地域を大切に思い、地域の方々に喜んでもらうことの価値を共有しながら、その一員として「今でき

ること」を行う取組の中で、「地域に役立つ人づくり」を進めることとしました。

取組は、鹿踊りの鹿頭や衣装のうち、生徒の手で作ることができるものは制作すること。地域の方に協力いただきながら、指導は「生徒から生徒へ」を基本とすること等を方針として進めることにしました。

まず、総合的な学習の時間に復興関係講座を設定し、鹿踊りの鹿頭と衣装を制作しました。衣装の裁断や、しつけぬい・本縫い作業、鹿頭の型取り、塗装・仕上げ作業などに取り組みました。6時間ずつ2日間では完成できず、放課後の時間を利用して完成にこぎつけました。その後、練習は全員参加とし、授業や放課後に生徒から生徒へ伝承する形で進めました。

そして、文化祭本番では、地域の方々や教会の方々を招待し発表しました。生徒からは「伝統が私たちが途切れないように」「郷土芸能が復興の一つになってくれたらいいな」「伝承するものだから1、2年生には下手なものは教えたくないし、見せたくなかった」という熱意ある感想が多くあげられました。また、来校者からは「立ち上がるのに時間がかかっている大人の代わりによくやってくれた。全員参加の取組もよかった」という感想が寄せられました。

(4) まとめ

郷土芸能を、生徒の手で伝承していく形に移行したことで、自分たちの役割や貢献できることについて考える機会となり、生徒の意欲を高めることができました。来校者の方の感動が生徒に伝わり、地域のために努力し喜んでもらうことや役立つとすることの価値を実感することができました。また、太鼓や鹿頭の方法、袴等、多くを支援していただき、感謝する心が自然に生徒たちから出てくるようになりました。本校では、今できることを一生懸命にやり、復興に役立てる人づくりをすることが、復興教育の大きな柱として位置付いたと思います。

4 金ヶ崎中学校の取組

(1) はじめに

本日はボランティア活動、復興支援バザーを

柱とした、被災地への復興支援活動について発表します。本校の震災支援復興活動は、昨年度4月の生徒総会での生徒からの提案がきっかけではじまりました。生徒から学校として被災地への募金活動、被災地を訪れてボランティア活動をしてはどうかという意見が出され、これをきっかけに自分たちにできることを行いたいという意識が、生徒の間で高まっていきました。

(2) 実践の概要

昨年度の取組を紹介します。募金活動は文化祭の時期に合わせ、学校以外に町内の店舗前で一般の方々からも募りました。被災地でのボランティア活動については、昨年度11月に当時の3学年141名が陸前高田市を訪れ、がれきの撤去作業や、施設内の清掃、車椅子磨き、合唱の披露等を行いました。さらに、募金を復興支援指定校である大船渡市立大船渡中学校と末崎中学校に届けました。また、昨年度12月には、宮古市の仮設住宅へプラランターに寄せ書きをして送ることができました。

今年度は事前に全体学習会を開き、4月に2学年156人が陸前高田市にある4か所の施設を訪問し、作業を手伝ったり、保育園児と一緒に遊んだり合唱を披露したりしました。

生徒達は自分の目で被災地の状況を見て、ボランティア活動をし、さらに被災者の方々の実体験を伺うことで、生きることについて考えるきっかけを得ることができました。

夏休みには、釜石東中学校と部活動交流会を開く機会がありました。合同練習や練習試合でプレーする中で、互いに心を通わせながら、あたたかい時間を過ごすことができました。

9月には、生き方講演会を開きました。前年まで釜石東中学校にいらした先生を講師に招き、震災当時の釜石東中学校の教育現場の様子についてご講演いただきました。

また、10月には少しでも復興の力になることができないかと考え、文化祭で被災地の製品を販売しました。製品はいずれも生徒や保護者、来場者に好評でした。さらに11月には、3学年の生徒130人が大船渡市の海岸清掃のボランティアを行いました。また、釜石東中学校の2学

年の宿泊研修に合わせて学年交流会を開き、互いに打ち解けることができました。

(3) まとめ

本実践の成果は3点です。1つは震災復興に関わる講演会やボランティア活動、交流などを通して、人の命の重さ、人と人との絆、当たり前の生活への感謝の気持ちなど、生徒が実感を伴ってかみしめることができたことです。2つは、組織的にボランティア活動を行ったことにより、何か自分のできることを行いたいと考えていた多くの生徒が復興支援に携わることができ、個人の思いや願いをかなえることができたことです。3つは、内陸部に暮らす生徒にとって、ともすると遠い存在として捉えかねない沿岸の被災地や被災者の状況を、沿岸地区の同年代の生徒との交流を通して互いに心を通わせ、思いを分かち合うことで、震災を他人事ではなく自分自身にも関わる身近な問題として捉える姿勢を育むことができたことです。

一方課題は、震災からの復興支援は前例がなく、十分な計画や準備が整う前に手探りで活動を進めざるを得なかったことが多かったことです。活動の見通しが見え始めた今後は、計画的に実践を積み重ねていくことが求められます。

5 前沢高等学校の取組

(1) はじめに

前沢高校は3年後に90周年を迎える伝統校です。現在の生徒数は267名、全9クラスになります。1クラス20名という少人数の体制で、一人一人に非常に目が行きやすい学校になっております。

(2) 支援活動

本校は、震災後から気仙光陵支援学校の生徒さんとの交流や陸前高田市でのボランティア活動等を行ってきました。今年度も復興支援活動を継続するため生徒会執行部が動き始め、生徒総会でスローガン「つなげよう 絆の輪」を提示しました。そして、一部の限られた生徒だけが行うのではなく、月1回ペースで被災地に赴き、全員が1回は参加できる取組にしようと提案しました。

支援は大船渡市と陸前高田市で行ってきました。具体的には、がれきの撤去や個人宅の掃除をはじめ幅広い活動を行いました。6月に大船渡市の越喜来でNPO主催の花壇づくり等の環境整備に生徒30名が参加しました。同日、別のグループは陸前高田市でがれきの撤去作業を行っています。7月には36名の生徒が、仮設住宅に住んでいる高齢者の方々とトランプを一緒に楽しみました。また、岩手青年国際交流機構が行っている、「縁側カフェ」という企画の手伝いもしました。これは、被災者やボランティアを行っている人たちへ、リフレッシュの時間や空間として、コーヒーやお茶の提供を行う活動でした。そして、気仙光陵支援学校の生徒さんとの交流では、学校紹介をしたり一緒にクリスマスキャンドルやリース作りをしたりする中で徐々に打ち解けお互いに笑顔が見られるなど、いい交流ができました。

(3) まとめ

平成24年は、全12回ボランティアを行いました。「自分の目で見て、耳で聞いてやっと自分の中で震災津波を受け止めることができた」と感想に書いている生徒もいました。

また、自己肯定感が高まったという成果も見られました。ボランティア活動に参加した生徒の感想から、彼らの現在や今後の生活にとってプラスになっていると私は確信しました。

今年度、生徒会執行部の下部組織として「復興支援局」を設け、将来的に对外機関との渉外も考えていますが、生徒の主体性に関してはまだ支援が必要です。

今後の課題としては、活動の全校生徒・地域へのフィードバックが必要であると思われま。単なる活動報告に終わらないで、生徒一人一人が感じた思いを伝える工夫が必要であると思います。また、バス代等の資金確保も今後の課題です。

ボランティア活動は、「できる人が、できる時に、できる範囲の支援を行う取組である」ことを忘れずに、今後も細く長く支援を継続していきたいと思います。